

どうぶつこうえんニュース

Chiba Zoological Park News

No.23



どうぶつと私… (18)

Animals and I

ちどり

花見 薫

日本放鷹協会 会長



「遠くなり近くなるみの浜千鳥鳴く音に潮の満干をぞ知る」

ちどりは殆ど旅鳥で北から南へと長い旅の途中日本の海岸線に滞留するので浜千鳥と呼び種類も多く、古くから東京湾は干潮時には沖合2,000米まで干潟となり、かれらの絶好の採餌場所であった。

越冬地の暖国から繁殖のため北上し4月から5月にかけて船橋、行徳、浦安の耕田や干潟では雀大のコチドリ、シロチドリ、トウネンなどは岸寄りの浅瀬で忙しげにときには貝殻などをひっくり返し小魚、海虫類を捕食し椋鳥、鳩大の京女シギ、キアシ、ムナグロ、ダイゼン、コシヤク類は小蟹、シャコ、ゴカイなどを穴から咥えだし器用に呑みこみ、鳥大のダイシャク、ホーロクシギが蟹を咥えたのはよいが逆に長い嘴を挟まれ首を振り回し悪戦苦闘の様は滅多に見られない珍風景であり、また目大チドリは前指が3本だけ、後指がないので直行は苦手、右斜めに小走りに進んでは立ち止まり、ついて向きかえ左斜めに進んでは立ち止まる、酔っ払いが右を見据えてはヨロヨロ、左を見据えてはヨロヨロ、人間が酒に酔った状態、正に当を得ていると思う。

淡く霞む房総の連山を背景にあらゆる生物の千姿万態所謂いるとりどり生活模様が半世紀以前に堤防の上から眺められたことがまるで夢のようである。

上げ潮時になると干潟で三三五五餌稼ぎ中のかれら潮に追われて飛び立ちピューイピューイパイパイと鳴き交しながら小群から中群はては大群となり満潮になると洲浜や耕田に避難、潮待ちを繰返し約1ヶ月十分に栄養を摂取してゴム鞠のように肥えて雪氷の融けた北の国へ帰り営巣、産卵、抱卵、育雛に明け暮れ6・7月で子育てを終え、南飛の途上再び東京湾に足を止め8月から10月まで春同様の生活をなし、なぜか春より1ヶ月多く食い溜めをして旅立つ。

東京湾の旅鳥にとっての航空機の中継基地同様、休養、整備、補給と満ち足りたちどりたち自然に恵まれたかれらを懐想し思い出を綴る。

目次

表紙 カピバラ	1
どうぶつと私⑱ ちどり	2
グラビア ツクシガモ	3
特集 「ツノを持った動物たち」	4
動物公園の動物⑱	6
動物公園の植物⑱	6
飼育よもやま話	7
動物公園日誌から	8
写真コンクール	10
飼料センターから 平成8年度 行事予定表	11

表紙の動物説明

カピバラ

南アメリカのアンデス山脈より東側の川辺の草原に集団で生息しています。現存するげっ歯類では最大で、体長110～130cm体重40～60kgにもなります。

水辺での生活に適した体をしていて、指の間には小さな水かきがあり、泳ぎもうまくて数分間ぐらい潜ることができます。

2対の門歯は非常に大きく、短い枯れ草でも上手に食べることができます。一回に4～5頭の仔を生みますが、仔は早熟で4～5日で草を食べることができます。

撮影・宮川 千尋

動物飼育数

哺乳類	69種	542点
鳥類	86種	349点
爬虫類	4種	20点
両生類	1種	1点
魚類	2種	7点
総計	162種	919点
平成8年2月末日現在		

ツクシガモ

ガンカモ目 ガンカモ科



撮影・宮川 千尋

ツクシガモはガン類とカモ類の中間型といえるカモで、雌雄とも白黒の体に栗色の胸帯がある美しい羽色をしています。

ユーラシアの温帯部に広く分布し、日本では冬鳥として九州の有明海に渡来します。干潟を好み海藻などのほか貝やカニなどの小動物を好んで食べます。

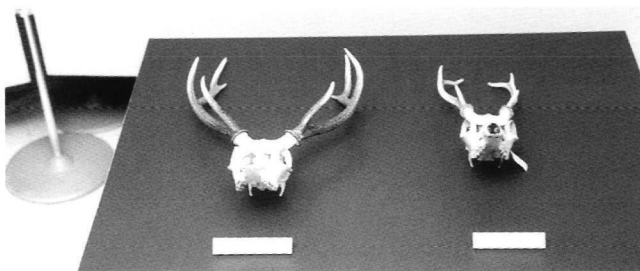
(秦 舜二 Shunji Hata)

ツノを持った動物たち

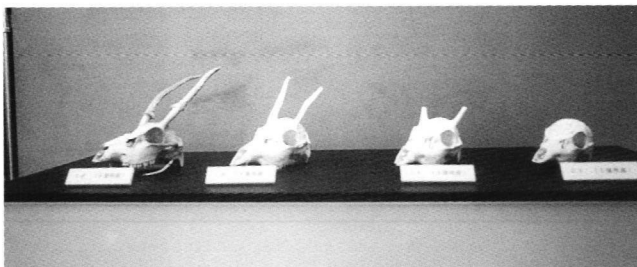
千葉市動物公園では特別展示「さまざまなツノをもつ動物たち」を現在開催していますので、その内容の紹介をかねて動物のツノについて説明をしてみましょう。各地の動物園にはツノ（以下、角）をもつ動物を数多く見ることができます。哺乳類のなかで特に有蹄類とよばれる動物がさまざまな角をもっています。偶蹄目（ウシ、シカ、ブタの仲間）と奇蹄目（サイ、ウマ、バクの仲間）とに分類をされています。そして偶蹄目の動物ではりっぱに発達、進化した角を見ることができます。ただし、シカ科のなかでも角を持っていないもの、トナカイのようにオスのみならずメスにもその角が見られるなど、そのバリエーションはさまざまです。



①シカの角は毎年抜けかわり多くの枝分かれを見せ、典型的なりっぱな角となります。“袋角”といわれるピロードのような皮膚の角から、固い角への形成を見せることで“袋角”を脱ぎ去る特徴を見せています。年齢とともに角も大きく成長し、形・枝の数も発達、成長してゆきます。血液が栄養分やカルシウムの供給することでありっぱな角となるのです。



千葉県産のニホンジカの頭骨標本（オス）



1, 2歳の若い個体は、同じ年齢でも栄養条件などの違いにより、長さが異なることもわかります。

②ウシの角では骨突起にケラチン質（角質）が付着し、洞角

（ほらづの）とも呼ばれ、英名ではhorn、前述したシカの角Antlerとは区別しています。一生抜けかわることはなく、年齢とともに成長します。通常角は左右に1本ずつ見られます。

③キリンの角はその組織、成長のしくみはウシのものと同様で、角というより角突起に皮膚が付着したものです。キリンの場合、生まれたばかりの子供はまだ骨化されていない柔らかい角を持っています。

④ブロングホーンの角はシカとウシとの中間型といえます。構造的にはウシのものと似ていますが、頭骨から出ている角突起にケラチン質の付着が見られ角を形成しています。このケラチン質が毎年抜け落ちることが見られるのです。シカ同様にオスだけにこの特徴が見られます。

⑤サイの角は皮膚が変形したもので抜けかわることはなく、年齢とともに成長、発達します。中実角とも呼ばれ、体の正中線上にあります。

以上の角の概要について説明を加えましたが、展示ではレプリカを含めた頭骨や角を展示しており、角の大きさや頭骨からはえ方を実際に見ていただけます。



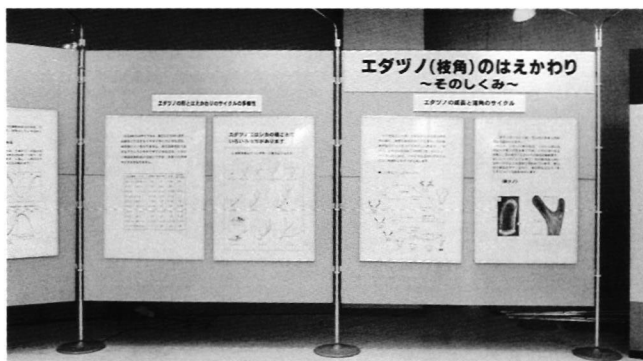
千葉市動物公園では飼育の経験はありませんが、大きな角の代表格であるヘラジカ、アカシカの落角したものを生態を含めた角の展示、また当園で飼育をしていたアクシスジカの角もご覧いただけますので、実際の大きさ、角のはえ方を間近で観察、比較することもできます。

角についてのアウトラインの説明をご覧いただいた後のコーナーでは典型的かつりっぱな角を発達させるシカの角一枝角ーに焦点を当てて、はえかわるサイクルそして季節変化の影響の実験例などの報告を興味深く読むことができます。

枝角…多様な形、種によるはえかわりのサイクルの違い

一口に枝角といっても、その形やはえかわりのサイクルは実に多様です。非常にシンプルな一、二尖（尖った先端が1本の角を一尖、枝分かれして先端が2本のものを二尖、と呼びます）の枝角を持つ種類から、大きく複雑な形をとるものまで、様々です。

概して、高緯度地方に生息する種類ほど体も大きく、角も大きく複雑な形をとるようです。

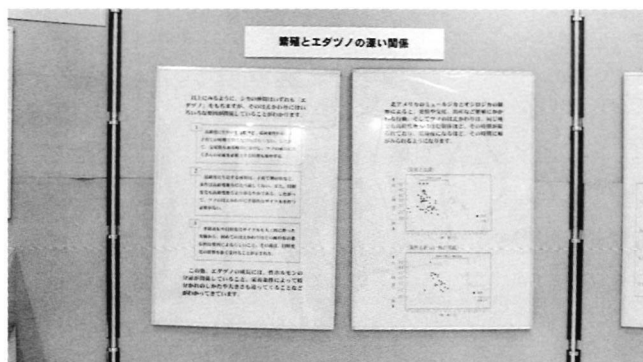


また、トナカイやヘラジカが1～2月の厳寒期に入る前に角を落とし、4～5月の暖かい季節になってから角の成長が始まるのに対し、低緯度地方のアクシスジカやルサジカなどははえかわりの時期が特に決まっているわけではありません。

これは、シカの仲間の繁殖や子育てに必要な自然条件と、深く関係しているためと考えられています。

トナカイなど、長く厳しい冬を送らなければならない種にとっては、いつ子供を出産するかは大きな問題です。食料の豊富な時期に子育てができるためには、その時期にあわせた交尾期を持つ必要があります。秋、オスがすっかり皮膚をはげ落とした立派な角を持ち、猛々しい限りのこの時期こそ、交尾期なのです。そして厳しい冬を迎えるころ、役目を終えた枝角は「角座」から自然に脱落します。そして、遅い春の訪れとともにまた角ははえ始め、急速に成長し、約2ヵ月で完成します。

しかし、赤道に近い地域に生活する種は、四季に左右されることなく繁殖できる条件にあり、したがって統一された交尾期もありません。



また、おもしろいことに、同じ種でも高緯度地方から低緯度地方にかけてかなり広い分布域を持つ種類では、低緯度に棲む群れの方が高緯度に棲む群れよりも、角を落とす時期にばらつきが見られるということです（当展示ではミュールジカとオジロジカを紹介）。

さらに、どのような種が、落角の決まった季節サイクルを持っているかも紹介しています。

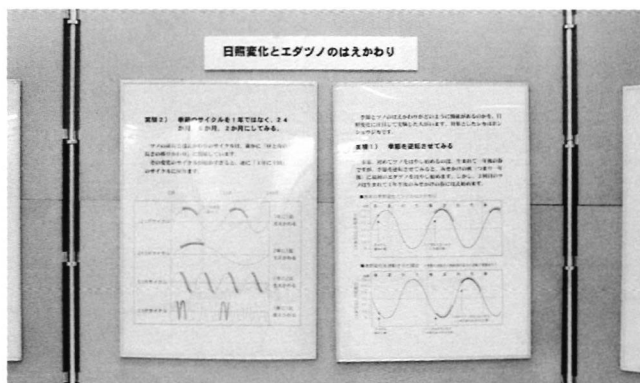
人工的に日照変化のサイクルを作った実験から

普通、日照時間が長くなり始める時期を春、短くなり始める時期を秋と私たちは呼んでいますが、その日照時間の変化のサイクルを人工的に6ヵ月や2年といった長さに縮めたり延ばしたり、あるいは春と秋を逆転させたり、といった環境を作り、

そこでニホンジカを飼育し、枝角のはえかわりの様子を観察した人がいます。

それによると、季節変化のサイクルが6ヵ月くらいですと、1年に2回のはえかわりが見られますが、それより短いサイクルだと逆に1年に1回に戻るそうです。また、初めて角をはえるのは、自然な環境では生まれた翌年の春、2回目の角は2年後の春となっていますが、季節逆転の環境ではちょうど1年後、人工的な秋に初めての角がはえ始めるそうです。

ずいぶん大がかりな実験をした研究者もいたものですが、このことによって、日照変化と枝角のはえかわりの密接な関係、そして初めての角は、日照変化に関わらず、生後約1年ではえ始めることなどがわかってきました。



そして最後のコーナーでは縄文時代の貝塚等から出土された品々がシカの角を利用していた事実が判明しています。

古代の人間の生活と枝角との深い関係

遠い古代から、私たちはシカを主な狩猟動物のひとつとして暮らしてきましたが、肉や毛皮だけでなく、枝角もいろいろな道具に利用していました。日本でも北海道や青森の縄文時代の遺跡から、動物の角や骨から作った道具がたくさん発見されました。伊達市（北海道）や戸井町（青森県）の教育委員会の協力により、その発掘の様子を写真で紹介しています。

釣針や銛頭、槍の先、そしてヘアピンや宗教的なアクセサリなどが、シカの角から作られた主な道具です。適度な強度と粘りがある枝角は、加工もしやすく貴重な素材だったと思われる



ます。こうした、生活道具を、実物大のレプリカ標本などでご覧いただけます。

特別展「さまざまなツノをもつ動物たち」は平成8年9月末日まで動物科学館2F・特別展示室で開催しています。

(牧野 辰男 Tatsuo Makino・並木 美砂子 Misako Namiki)

動物公園の動物…⑮

Animals in the Chiba Zoological Park

～ジェフロイクモザル～

ジェフロイクモザルはサル仲間でもとりわけ身軽です。枝から枝へと腕渡りする事をブラキエーションと云いますが、クモザルは強い骨と筋肉を備えた長い手を使って見事なブラキエーションをします。また太い枝の上をすごい速さで2足歩行したり、ツルツルの壁のコーナーを手足をつつ張ってよじ登ったりする事もあります。さらに尾を使った技も見事なものです。「第3の手」とも云える尾は、先端の裏側数cmには毛が生えてなくて皮膚が露出してそこに指紋によく似た尾紋とも云えるひだがあります。感覚が指のように敏感でこれで小さな果実を持ち運ぶこともあれば、尾だけで枝にぶら下がることもできます。まさにクモザルは動物公園一の軽技師と云えましょう。



ジェフロイクモザルは野生では中央アメリカのメキシコ東部からパナマにかけての熱帯雨林に生息しています。樹上性で、それもってペン近くで生活し、地面にはあまり降りてきません。2～8頭くらいの群れをつくって行動していますが、時にはそれがくっついて20頭くらいの集団をつくる時もあります。主によく熟した果実を食べて、若い葉や昆虫を食べる事もあります。

クモザルは新世界（南アメリカ）ザルのテナガザルとも云われています。（ほんとはテナガザルではないですが）知能が高く、身体的にも新世界ザルの中ではかなり進化しています。腕がとても発達して脚より長い事、手が細長く曲っていてちょうどフックのようにになっている事、さらに類人猿の手の親指は小さくなっていますが、クモザルはさらに進化が進んでまったくなくなっています。

このようにとてもユニークで興味深いジェフロイクモザルです。比較舎では隣にエリマキキツネザルやマンドリルが居ます。これらと比べて観察すると、さらに彼らの素晴らしさが発見できます。皆様もじっくりながめて下さい。でもあまり見つめると、キキーと鳴いて怒るかもしれません。

（横山 浩 Hiroshi Yokoyama）

動物公園の植物…⑧

The plants in the Zoological Park

～アキニレ～

動物公園内には、喬木（スギやケヤキなどの高い樹木）が約130種・16,500本あり、生育しています。

喬木には、落葉樹と常緑樹があり、園全体では、落葉樹が多く植えられています。

今回は、落葉樹のアキニレを紹介します。

アキニレは、別名イシゲヤキ・カワラゲヤキとも呼ばれ、ニレ科の落葉喬木です。

ニレは、北半球の暖帯から温帯に生育しています。

ニレ属に属する樹木として、わが国ではハルニレ、アキニレオヒョウがあります。

エルムとも呼ばれ、北海道の平地でよく育つ落葉高木はハルニレのことです。

ハルニレは本州以南の温帯林や亜寒帯林にも、ほかの落葉広葉樹と混生しますが、本州以南に通常にみられるのは、アキニレのほうです。

左右不对称の小さな葉がかわいらしいアキニレは、街路樹としてもよく植えられています。



ハルニレは四月ごろ、アキニレは、10月ごろに開花するためこの名がありますが、とくに花は目立ちません。

建築材、器具材としても用いられていますが、材は堅く工作が難しいという難点があります。

中国産やヨーロッパ産のニレ類のある種のもは、強靱で材質がすぐれ、かつて船材として盛んに使われました。

なお、アイヌの織物「アッシ」は、同じニレ属のオヒョウの樹皮からつくられます。

園内に植栽されているアキニレは、主に園路周辺に多くが植栽され、夏場の直射日光を遮り、涼風のなかで動物の観察が出来る様配慮し、植栽されているものです。

（白鳥 次雄 Thuguo Shiratori）

飼育よもやま話

Animal Episode

おいらは「のりお」

おいらは、のりお。おいらは、いつもは多くを語らないが、今回はちょっと語らしてもらおう。

そもそも、みんなは俺達“ムフロン”の事を知っているのかい？俺達はヒツジの先祖、つまり、俺達のおかげで今のヒツジ達が存在するんだ。



おいらは今、ムフロン軍団のボスをやっている。俺達は日中のんびりと過ごすのが好きなので、ボスと言っても存在感がないと思われてしまうかもしれないが、これが結構大変なのさ。俺達は朝、寝床から展示場へ、夕方は展示場から寝床と往復するんだが、その時がおいらの出番なんだ。小学生の登校時に例えるなら、朝は副班長、夕方は班長をやるんだ。朝は、全員展示場に出れる様に、1番後ろから出るんだ。困るのが夕方なんだよ。実は、おいらも含めて俺達はみんな小心者なんだ。小心者というと聞こえが悪いから、とっても警戒心の強い動物なんだ。誰だって広い場所から狭い場所に入る時は特に警戒する様に、俺達も展示場から寝床に入る時は警戒するんだ。そんな時の出番が決まっておいらさ。何て言っても、おいらが先頭に立って行かなければ他の連中は1歩たりとも前に進まないし、それに目で訴えてくるんだもの。だから、夕方寝床に入る時は全員集合させるんだ。もし、寝床に入って全員そろっていなければ、また展示場に戻って残りの連中を連れて来る事もあるんだ。でも、餌に夢中になり忘れてしまう事も多いけどね。

また、俺達は秋から冬にかけて毎年ボスの座を賭けて争奪戦をするんだ。俺達ムフロンの雄は、成長するに従って角が大きくなり、その角を使って“角突き”と呼ばれている戦いをするんだ。時には額から血が出る程の戦いもあるが、まだまだ若いもんには敗けてられないよ。でもこの時期のおいらには気を付けてくれよ。目の前に動くものはすべて敵に見えてしまうから、これまでも何人かの飼育係をど突いてしまった事があるんだ。この場をお借りして深くお詫び申し上げます。

まー、そんな俺達だけど、今年は4月になればおいらの子供達もみんなの前に登場する事ができると思うから、是非俺達に逢いに来てほしい。その時は、少し照れ屋のおいらだけど“のりお”でも“のりピー”でもいいから呼んでくれ。

(中村 彰宏 Akihiro Nakamura)

わが輩はヤクである

わが輩は、ヤクである。名前かい。「ジン」と呼んでくれ。わが輩は、千葉市動物公園にある家畜の原種ゾーンで働いている。働いている？ように見えないって、これがね、わが輩のお仕事なのさ。「おはよう、ジン！」シゲルは、言う。1日の始まりである。朝から夕方まで働く。わが輩は、お金には興味がないね。その代り、朝と夕方に食べ物を貰っているのさ。草食性であるわが輩は、草が大好きである。働いた後の一口がたまらないね。あの味、あの園応え！そうそうこれが、わが輩の楽しみの一つでもあるな。そして、女好きでもある。これでもわが輩は、男だからね。立派なものを持っているよ。見てくれ！この角さ。凄いだろう。これを使って、柵を壊したこともあるさ。その度にシゲルが修理しているよ。ブツブツ言いながらさ。この柵も丈夫なのに化けるらしいが、さてさて今度は、どうやって破壊してやろう。わが輩の楽しみが、また一つ増えるな。なんてね。そんなにわが輩は、暴れん坊ではないさ。こんなわが輩でも、苦手なものがあるね。それは、暑い季節で夏と言うらしい。わが輩の体は、長い長い毛で被われている。寒さに強いのであるが、さすがにこの季節は、暑くて元気がなくなるのさ。そう、壁掛式の扇風機を付けてくれたが、それでも暑いね。クーラーってのが欲しいな、クーラーってのがさ。まあ、贅沢は言えないか。これでも家を持っててさ。狭いながらもマイホームだよ。驚いたかい。しかも庭付きさ。プールは、ないけどね。どう、わが輩の家に寄っていくかい。この部屋でわが



輩は暮らしている。隣の部屋は、妻の、おっそうだ！わが輩には、妻がいてね。名前かい。「ユキ」で言うのさ。シゲルには、怖い女だろうけどね。いい女だよ、子育てがうまくてね。わが輩の出る幕はないね。でも教育はするよ。この角でさ。息子たちも娘たちも自立していったよ。今、娘が一人いてさ。いつか自立するんだろうね。わが輩は、大黒柱だから、ここにいるさ。でもね。夢をみるよ、夢さ。男だからね。わが輩を見掛けたら「ジン」と呼んでくれ。気が向いたら振り向くことにしよう。

(千葉 茂 Shigeru Chiba)

動物公園日誌から

From Zoological Park Diary

'95年8月1日～'96年1月31日

- 8月1日 青草の種類、本日よりソルゴーとなる
- 〃 モウコノウマ（全頭）腰麻痺予防薬投与
- 〃 ペンギン（全羽）鳥マラリア予防薬投与
- 8月2日 ホンドタヌキ（3頭）展示替えのため搬出
- 8月4日 アビシニアコロブス、麻酔下で耳の検査
- 8月7日 アンデスイワドリ（雄1羽）頭胸部打撲で死亡
- 8月9日 ニシムラサキエボシドリ（雄1羽）啄傷で死亡
- 8月10日 カンムリヅル（1羽）骨折、予備室へ隔離
- 8月11日 ヤクの仔（7月13日生）に角が伸び始める
- 8月12日 トナカイ（雄）袋角むけ始める
- 〃 クロミミマーモセット（1頭）死亡
- 8月16日 ローランドゴリラ（雌）食欲不振続く
- 8月17日 アカハナグマ、検疫明けでゾウ班担当となる、新獣舎完成まで、馴化施設で引き続き飼育とする
- 8月21日 アビシニアコロブス（雄、ピット）死亡
- 8月23日 今年も、猛暑のためか、夕方獣舎へ入るのを渋る動物が多い
- 〃 カピバラ（3頭）繁殖
- 8月25日 ムフロン、雄同志の角突きが見られた（今年は例年より早いようだ）
- 8月28日 トナカイ（雄）袋角全体的にむけ始める
- 8月29日 学芸員実習、深山さん（日本大学）本日で終る
- 9月5日 風邪をひいていた、エリマキキツネザル（2頭）退院する
- 9月7日 トナカイ袋角ほぼむけてきている
- 9月8日 ワタボウシパンシェ（2頭）繁殖
- 9月9日 ビグミーマーモセット（2頭）繁殖
- 9月13日 ゲルディモンキー（雄1頭）静岡市立日本平動物園に寄贈
- 9月16・17日 台風12号接近のため…大半の動物は展示場に出さず
- 9月18日 マンドリル、出産するが今回も仔は残念ながら死亡する
- 〃 家畜馬（5頭）伝染検査のため採血する
- 9月19日 第1次開園以来飼育していた、モウコノウマ（雌ハル）が、急性肺炎のため死亡する



9月23日 動物愛護週間特別講演会開催

- 9月24日 ワンポイントウォッチング開催（ショウガラゴ）
- 9月27日 千葉テレビ、レポーターの1日飼育体験の取材あり
- 10月1日 ゲルディモンキーの人工哺育の仔、自力でよく採食ようになる
- 10月2日 ホンドザル、昨年および今年生れの仔に、入墨と破傷風ワクチンの接種を行う
- 10月3日 グレビーシマウマ腰麻痺予防薬投与
- 10月7日 ビグミーマーモセット、9月生れの（仔1頭）死亡
- 10月9日 科学館特別展「ツノを持つ動物たち」開設
- 〃 ミーアキャット（雄1頭）放飼場の巣穴から出て来ず行方不明
- 10月11日 セスジクスクス（1頭）腸捻転で死亡



- 10月15日 自然と遊ぶ教室開催
- 10月17日 馬の博物館学芸員2名、モウコノウマ、ロバ、グレビーシマウマ、ハートマンヤマシマウマの鳴き声を録音のため、来園（19日まで）
- 10月18日 アジアゾウ（雄スラタラ）、このところ糞投げ等をする事多し、ムストか？
- 10月22日 ワンポイントウォッチング開催（ミーアキャット）
- 10月23日 園内、全域停電（年次定期点検のため）
- 10月26日 今年生れのムフロン（4頭）耳標装着
- 10月28日 ムネアカタマリン（2頭）繁殖
- 10月29日 動物を計る会開催（測定動物：ポニー他）
- 10月31日 発育不全のカピバラの仔死亡する
- 11月3日 ズークイズラリー開催
- 11月6日 トナカイ（雄）左角落角する
- 〃 マレーバク（雌）1昨日の雄の執拗な尾行行動、マウンティングのため、起立するのが困難である
- 11月9日 千城台西中学校、6名職場訪問受入れ
- 11月13日 グレビーシマウマ（雌サクラ）鎮静きかず、削蹄は延期とする
- 11月15日 草食獣への青草の給餌、ソルゴーよりイタリアンライグラスに切り替える
- 11月16日 プレーリードッグ、江戸川区立江戸川動物園と（3頭）搬出、（4頭）搬入の相互贈呈を行う
- 11月17日 ショウガラゴ（雌2頭）広島市安佐動物公園に寄贈
- 11月20日 ハートマンヤマシマウマ（雄1頭）埼玉県こども動物自然公園に寄贈
- 11月26日 ワンポイントウォッチング開催（ラマ）
- 11月28日 オオカンガルー（1頭）繁殖（顔出し）
- 11月30日 職場訪問、更科中学校生徒5名受入れ

11月30日 アカハナグマ（2頭）新獣舎に移動



僕達に逢いに来てネ！

12月9日 ヨツツノヒツジ（雄1頭）死亡

12月10日 アカミミコンゴウインコ（雌1羽）死亡



12月10日 クリスマスのつどい開催

12月13日 キジ、猛禽類、ニューカッスル予防ワクチン接種
ホオカザリヅルの種卵、東京都恩賜上野動物園より受贈し、人工孵化を試みる

12月15日 セスジクスクス（1頭）繁殖

12月20日 アメリカアカリス（雄1頭）胃潰瘍で死亡

アフリカヘラサギ、雌雄鑑別の結果4羽共雌であった
トナカイ放飼場前より、テレビ朝日の生中継あり

12月22日 今冬は、寒さがきびしいため、アフリカハゲコウを
馴化施設に移動させ、展示はしばらく休止とする

12月23日 検疫中のプレーリードッグ（4頭）個体識別用のバ
ーコード入りマイクロチップを埋め込む

12月26日 アカテタマリン（2頭）ムネアカタマリン（4頭）
到津遊園に寄贈

12月27日 エミュー（2羽）福岡市動植物園に寄贈

12月30日 セーブルアンテロープ（1頭）繁殖

1月1日 デマレルーセットオオコウモリ（1頭）繁殖

1月4日 ポニー、園内散歩に出し、観客とのコンタクトを行
う

1月6日 ホオカザリヅルの種卵2卵目、東京都恩賜上野動物
園より受贈し、人工孵化を試みる

1月6日 アカテタマリン（2頭）繁殖

1月10日 カリフォルニアアシカの仔（マユ）、餌付継続中
であるが、なかなか冷凍アジに餌付かず



1月14日 バードウォッチング開催

1月17日 ハイイロヤケイ（雌1羽）頭部打撲で死亡

富山市ファミリーパーク、穴田さん、本日より1週
間の予定で、子ども動物園を中心に研修

1月20日 ゲルディモンキー（雄1頭）死亡

1月24日 第96回関東東北ブロック飼育技術者研究会開催
（21園館36名参加）

1月27日 「動物親善大使」アカハナグマの贈呈式



千葉市とアスンシオン市との友好のしるしとして、盛大に執り
行われました。



1月31日 ムフロン（2頭）繁殖（母親はそれぞれ別個体）

平成7年度写真コンクール入賞作品

POHOT CONTEST



銀賞

シンクロナイズド
スイミング

野本 昴治

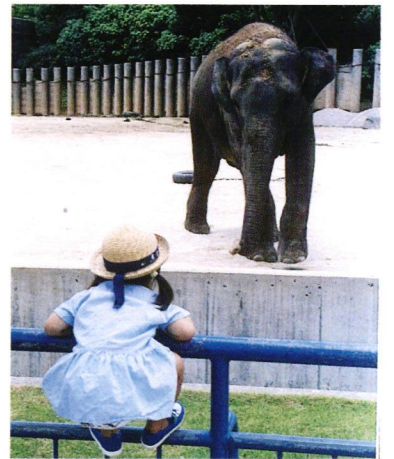
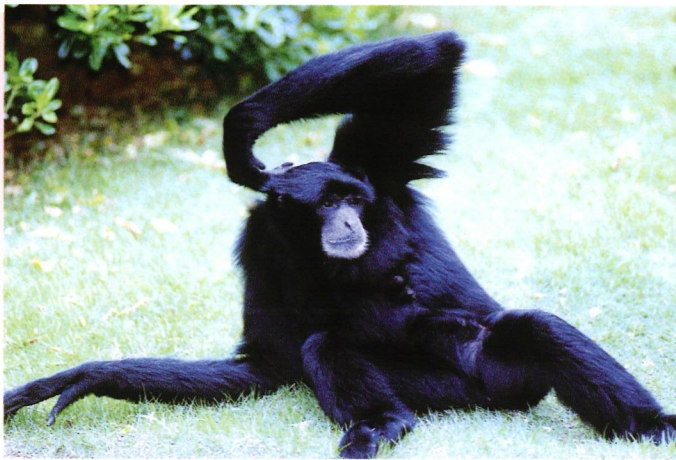
母と子
石田 美香子



金賞

はいポーズ

吉野 巖



特別賞

ぞうさんこんにちは

荒田 博美

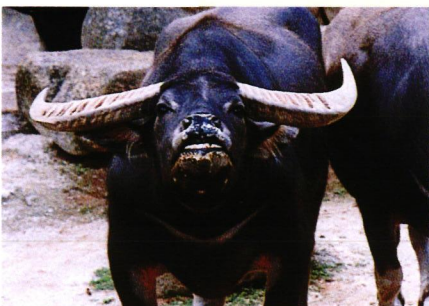


雨上り
藤原 正男



ハシビロコウ (優美)
堀田 光生

銅賞



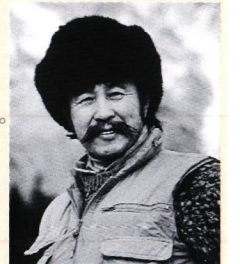
排尿のあとの貌
永野 登茂子

～写真コンクール講評～

好例の写真コンクールは、年々その作品の質の向上が見られるようになりました。

審査に当っては、いかに動物園らしさが表現されているかということを、最大のポイントにして選ばせていただいております。入選作品を見ていただければお分かりのように、頬笑ましさ、珍しさ、触れ合いや面白さなど、それぞれの映像を見ただけで、対話が生まれそうな写真です。

構図や動物のポーズなど、金賞作品に代表されるような、何気ない瞬間を、それぞれの作者が見事に撮らえているといえます。



動物・自然写真家 吉野 信

飼料センターから

～真心こめてお届けします！ 雪も嵐も踏み越えて～

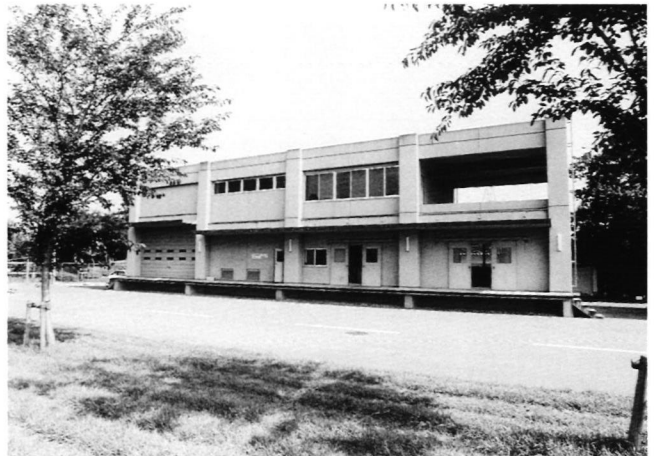
みなさんは不思議に思ったことはありませんか？動物たちが食べているエサはどこから来るのかって。千葉市動物公園には、約160種の動物たちが暮らしているのです。その数からしても非常に多くの、それも様々な種類のエサが必要なのにちがいない…。読者のみなさんは、きっとそんなふうに感じているのではないのでしょうか。

まさにそうなのです！！魚を食べるものあり、草を食べるものあり、肉を食べるもの、果物を食べるもの…とまあ、あげていだけでこのページが終わってしまいそうなほどです。そこで園全体のエサを調達する係が必要になってきます。飼育係のことを英語でAnimal Keeper（アニマル・キーパー）といいますが、さしづめエサの担当係は、Food Keeper（フード・キーパー）といったところでしょう。エサの担当係になると、ま



ず朝一番始めにする仕事はエサの配達です。動物公園は、様々な動物の特徴や種類に合わせて7つのゾーンから構成されています。その各々のゾーンに必要なエサを大きなコンテナ（野菜や果物などを分けて入れておくための入れ物）に積み込んでトラックで運んで回ります。そう、朝一番でやってくる牛乳配達

屋さんや、新聞屋さんのような感じです。動物たちの命の源であるエサを運ぶわけですから、雨の日だろうが雪の日だろうが配達を休むわけにはいきません。まさしく、宮沢賢治の『雨ニモマケズ、風ニモマケズ』の心境です。配達が終わると、次の日の配達に備えて、エサの仕分けをします。動物公園には、たくさんの量の野菜や果物を貯蔵しておける大きな冷蔵庫と、アジやサバといった魚を新鮮な状態で保存しておける、これまた大



きな冷凍庫を備えた飼料センターと呼んでいる建物があります。エサの担当係は、ここで1日の大半を過ごすのです。夏の暑い日には、外が30℃を越える日も珍しくありません。そんな日でも、冷蔵庫や冷凍庫の中を行ったり来たり。特に冷凍庫内はマイナス20℃に温度設定してあるので、単純計算でも1日で50℃の温度差を経験していることになります。けれど、動物たちが満足そうにエサを食べているところを思い浮べると、こんなことで音を上げるわけにはいきません。エサを仕分けたあとは、エサの注文をします。注文した量に応じて、八百屋さんが、魚屋さんが、パン屋さんが、牛乳屋さんが、飼料センターに品物を届けてくれるのです。

多くの方々の協力で、動物公園は成り立っているのです。

（高橋 宏之 Hiroyuki Takahashi）

平成8年度行事予定

写真コンクール	応募は10月10日まで	秋のZOOクイズラリー	11月
羊の毛刈りと紡毛教室	5月	クリスマス音楽会	12月
愛鳥週間特別講演	5月	新春特別行事	1月
ゆかいな森の音楽会	5月	バードウォッチング	1月
動物愛護標語募集	7月	春のZOOクイズラリー	3月
サマースクール	7月		
動物愛護週間特別講演会	9月	動物映画会	土・日・祝日・夏、冬、春休み中
折り紙教室	10月	ワンポイントウォッチング	
動物を計る会	10月		4・5・6・9・10・11・3月の第4日曜日

くわしくはちば市政だより（全紙版）でお知らせします。

